
ぼくとわたしと囚われし王子さま

七藤京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくとわたしと囚われし王子さま

【Zコード】

Z8355Y

【作者名】

七藤京

【あらすじ】

「囚われの王子さまって最高にダサイ」

長い髪とかわいい洋服、そして緩やかで幸せな生活。

大切な物を捨ててまでして、私はダサイ王子の野郎を助けなくちゃいけないのか。

まあ、だからって、逃げてばかりじゃいられないから。いつまでも馬鹿やって、遊んでなんていられないから。

だから私は僕になって、大切な物を捨てて、そして強くなつてやる

よ。バカでまぬけで名前しか知らない王子のため。
ねえ、今助けに行くからクソ王子。
あと一年は我慢しや。

プロローグ 僕は囚われの身になってしまった

今日は僕の17回目の誕生日だ。僕の家、サルビック城では親戚や富豪、貴族なんかを招いてパーティーをしている…はずだった。

「今宵は僕の誕生日パーティーに来ていただき、ありがとうございます。どうか最後まで楽しんでください！」

お礼の言葉が終わった時だった。

ガシャン、という何かが割れる音が広間に響き渡る。音のする方を向けば見知らぬ男…と言つても顔の半分は黒い布で覆われているのでよくわからないのだが、その、まあ、とにかく男が立っていた。

「酷いじゃあないか。この俺を呼ばないなんて」

どこかで聞いたことのあるような台詞だと思った。

「あなたは…！」

「イザベラか。大きくなつたなあ。いや、老けたの方があつてるか「お母様、知り合いでですか？」

「そうか、こいつがアルビンか。そうかそうか…」

「あの、あなたは？」

話について行けない。この方はお母様の知り合いなのだろうか。少なくとも彼はお母様の事をよく知つてゐようだった。

「アルビンー逃げなさいー！」

「え、お母様？」

「そうはさせないぜ？」

僕の覚えている事はここまでだ。なんともマヌケなこと僕はすぐには失つてしまつた。

最後に見たのは悲痛なお母様と父上の顔、それとこの城自慢のステンドグラスの無惨な姿だった。

01 もうか僕のために勇者になつて

「王さまが囚われの身なつー……だねえ」

なんともマヌケな噂が流れたのは一昨日くらいから。魔王が王子を気に入つてさらつたとか、魔王が世界征服するからその見せしめとか、魔王が王子に一悶懲して（んなバカな）さらつた等々……まとめてると王子が魔王に囚われた。

「あのや、その噂つて本当なの？」

「本当らしいよ。あ、ねえ。そろそろランチにしない？ お腹減っちゃつた」

そつまつてからメリルはがいの中からサンドイッチを取り出し、口を開けそれにはさみこびりついた。

メリルは彼女の名前。色々な事情で私の家に住んでる女の子だ。

「はい、これレーナの分だよ」

「ありがと」

チーズとトマト、あと鶏肉のサンドイッチだった。美味しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8355y/>

ぼくとわたしと囚われし王子さま

2011年11月24日22時56分発行